



伝統的な授業再訪、コロナ禍の動画授業、英語学の学び

文学部 野村 忠央



1972年北海道生まれ。生まれも育ちも北海道の道産子。好きな食べ物はそば、趣味は時代劇、日本史。学習院大学卒業、青山学院大学大学院博士後期課程修了。専門は英語学、統語論、英語語法文法研究。和光大学、北海道教育大学旭川校などを経て、2018年に本学に着任。以前の大学も含め、英語教職課程必修の英語学概論(英語学1)に相当する授業を担当。学会活動は日本英語英文学会会長、日本英語学会評議員、近代英語協会大会準備委員長、英語語法文法学会編集委員など。
(のむら ただお)

英語研究基礎演習、英語文法演習、英文法論、英語学特講、3・4年ゼミ(卒業研究)、言語系総合講座などを担当。以前、着任同期の小幡肇先生(当時の研修部主任)に原稿執筆を依頼されたが、自分は努めて伝統的な授業を行っており、何の参考にもならないのでと丁重にお断りした。しかし、今回、私の翌年に着任された(お互い初めての湘南キャンパスでの連合教授会であった)小林稔先生から再度の執筆依頼を受け、何かの参考にと存じ、お引き受けした次第である。

伝統的な授業来訪—板書の大切さ

私は7年間、高校の現場でも教えていたが、恐らく文学部英文科で一番板書をする教員である。130人以上の学生が履修している英語学1でも90分間、板書の連続である。他大の大学院に進学して、現在、埼玉県の高校教員をやっている親しい卒業生になぜ野村ゼミを選んだのか尋ねたところ、英米文化入門の野村先生の板書を見て、只者ではないと感じたからという趣旨のことを答えていた。

パワーポイントを使用すれば、私も学生も楽であろうが、言語に関する学びは目で見て、耳で聞き、口に出して発音し、手で書かなければ身に付かない(学会発表のパワポの使用とは目的が異なる)。英語の授業で強調される4技能は逆に全ての授業の理解に繋がる。最初に勤めた塾の塾長が1回の授業で生徒が消化できるのは板書で書ける分量が限界だと言っていたが、現代のパワーポイントの情報過多と学生がわかったことになることへの警告だと考えるべきである。

コロナ禍の動画授業

2020年3月からコロナ禍の世界が始まったが、全ての人にとって戻って欲しくはない苦い経験である。あの時期、対面授業は許されず、オンライン授業が要求されたが、その日の授業内容を全て文字起こした長大なWord文書を作成された先生方、詳細なパワーポイントを作って、それぞれのページで音声を再生された先生方など、それぞれに大変な苦勞をされた毎日であった。

私はそんな中、講義科目について、教員の顔が見える講義動画を作成することを決心した。情報システム課や教務課のみなさんの仕事を増やしたくなかったので、自分で三脚を購入して、自分のiPadを固定し、自分の授業風景を録画して、25分の動画を3本分作る作業を毎回、行った。毎週月曜日の研究日に出校して、この作業を繰り返したが、録画が上手く行っていなかったことに後で気づき、一からやり直しという試行錯誤の連続であった。帰宅がギリギリの北越谷駅発23時31分

